

阿波國 すきま 漫遊記

VOL.4 流れ橋

[取材・文・写真] 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐる紹介している。■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>



■ 神山町下分の流れ橋

橋げたがワイヤーでつながっている様子がよくわかる。橋脚には転石の衝突をガードする鉄板が付いている。

人と川の関係

関東から徳島に移住してまず感動したのは吉野川の川としての豊かさだった。ここで言いたい豊かさは単に自然が豊かという意味ではない。第十堰から下流はしぜん人工的な放水路であって、自然の川ではないからだ。手付かずの自然という意味でなく、川と人間の関係の豊かさに感動するのである。毎日の通勤で目にする川漁師や、沈下橋、渡し舟などの景観は、ここではまだ川と人の良好な関係が失われていないことを物語っている。

前世紀の末に、21世紀は心の豊かさを追求する時代になる言われながら、いまの日本人は小さな失敗も許さないような窮屈な社会を作り出している。心に余裕がないのだ。その基準に従えば、沈下橋などは転落の危険がある欠陥構造物とみなされるだろう。だから逆に、沈下橋のようなルーズさが許容される社会があるとしたら、それは人の心に余裕のある真に豊かな社会だとも言えるのではないだろうか。

◆ こんにやく橋

だから鮎喰川河口のこんにやく橋が撤去されると知ったときはショックが隠せなかった。

私の得意分野は建築なのだが、橋やダムなどは土木の分野である。少し違うということもあって、毎日こんにやく橋を眺めながらも一度もきちんと訪れたことがなかった。台風で壊れたままのこんにやく橋が撤去されると知って、きちんと見ておくのだと激しく後悔したがすべては後の祭りである。私の橋めぐりは、この時から始まったのだ。



▲ 徳島市春日町のこんにやく橋

2004年の台風で橋げたが流されたまま、ついに元の姿に戻ることもなく撤去された。全国にも誇れる景観だったと思うのだが。

◆ 木造の実用橋のいろいろ

橋と言ってもいろいろあるタイプがあるが本橋で採り上げるのは観光用ではない

「実用橋」である。なかでも木造の実用橋はもはや絶滅危惧種と言ってもいい。木造の実用橋は、丸太橋、つり橋、土橋、流れ橋に分類できる。県内のつり橋はかすら橋が有名だが観光用であって、実用橋ではない。だが林業用のつり橋には木製の橋板のものがいくつかに存在する。土橋とは木の橋げたの上に土やアスファルトを敷いて平らにした橋だが、県内では本格的な物件は思い当たらない。流れ橋とは橋げたが橋脚に固定されていない簡易な造りの橋で、増水時に橋げたがわざと流されるようになっていて、今回はこの流れ橋をいくつか紹介しよう。



▲ 上勝町旭の流れ橋(1)

橋脚はコンクリート製で頑丈そうだが、橋げたはまるで丸太橋のよう。橋の下は深みなので渡るにはかなりの勇気がいる。



▲ 徳島市八万町の流れ橋

こんにやく橋の近くにかかる橋。水面からの高さがないので、増水時にはすぐに流されることだろう。



▲ 徳島市八万町のこんにやく橋

徳島市内にもう一つこんにやく橋の名を持つ橋がある。八つ橋ふうの橋げたがフォトジェニック。いま県内で最も保護したい橋だ。



▲ 徳島市飯谷町の流れ橋

私が見つけたときにはすでにこの姿になっていた。おそらくこの橋脚も、台風のたびに欄の歯が欠けるように消えてゆくことだろう。



▲ つるぎ町貞光の流れ橋

橋脚の高さがそろっていないため橋板が波打っている。橋幅は広めなので自転車に乗ったまま楽々と通れるだろう。



▲ 神山町阿野野駒場の流れ橋

激しく蛇行する鮎喰川の先行谷を短絡する間道に掛かる橋。焼山寺から大日寺への道路はこの橋を跨っている。



▲ 神山町阿野野那瀬の流れ橋(2)

増水時に行ってみた。奥のほうに橋げたが流されているのが見える。元に戻すには小型のコンボが必要になるのだという。



▲ 神山町阿野野那瀬の流れ橋(1)

遠目にはのどかに見えるが、水面からの高さがあるので、実際に渡ってみるとかなりの迫力がある。



▲ 上勝町旭の流れ橋(2)

橋げたを結びつけておくワイヤーは意外に細い。何度も流されているのだから、橋げたの角が丸くなってしまっている。

◆ 流れ橋の魅力

流れ橋の魅力は自然の力に逆らわないシンプルさだ。雨が降れば川は増水する。増水すれば川は渡れない。何百年と変わらず続いてきたシンプルな生活がそこにはある。流れ橋から見えてくるこのシンプルな暮らしこそ、現代の日本では最も得がたいせいたくなライフスタイルなのである。